
特別！美化委員会

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特別！美化委員会

【Nコード】

N5903E

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

入学してすぐにカゼで休んでしまった楠木比奈は、登校初日にみたクラスメートに目を奪われた。彼、桐生隼人の頭の上に小さな狐がいたのだ……。『学園オカルトアクション』

楠木比奈が教室に入ると、にぎやかだった教室が一瞬にして静まり返った。

「おい皆。入学式の日から一週間。風邪で寝込んでいた楠木だ。今日から皆と一緒に授業に出られる事になった。仲良くしてやれよ」

担任教師がそう言うと、生徒達が口々に返事をする。担任に促され、簡単な自己紹介をただけで、比奈は恥ずかしくて顔が上げられず困った。

「桐生^{きこうせい}。立て」

「はい」

担任教師に呼ばれて返事をしたのは、男子生徒のようだ。比奈はゆっくりと顔を上げた。

男子生徒は廊下側の前から三番目の席にいた。立ち上がった男子生徒と目が合い、息を飲んだ。秀麗な顔立ちの少年だが、目つきが鋭いせいで不機嫌に見える。

「楠木。お前の席は桐生の後ろだ。桐生。お前は楠木と同じ美化委員なんだから、今日はお前が楠木に学校を案内してやってくれ」

「え？ 美化委員なんですか。私」

担任教師に問うが、担任教師は苦笑いを浮かべただけだった。比奈がいらない間に委員会を決めたのだろう。こういうとき、休んでいると不利になる。

気になった事はもう一つある。先ほど息を飲んだ原因。それはあるものを見たからだ。

比奈はもう一度、桐生と呼ばれた男子生徒を見る。男子生徒は担任教師に言われた言葉に不満の表情を浮かべていた。面倒くさい事を押し付けられたとも思っているのかも知れない。だが比奈には彼に睨まれていることよりも、気になるものがあつた。彼の頭の上に。

彼の頭上にはなぜか、狐が乗っていた。頭に乗る程度の大きさでかなり小さい。両手の平を並べたくらいのサイズとでもいおうか。その小さな狐は桐生と呼ばれた少年の頭の上で大きな欠伸をした。尖った歯が見える。

なんで誰も気にしてないんだろう。頭に動物が乗っているのに。ペットなのかもしれないが、だからといって学校に連れて来て良いはずがない。そう思うが、誰も狐に注意を払わない。比奈は担任教師に促されて自分の席へ向かった。

桐生の横を通り過ぎるとき、もう一度彼の頭の上の狐に目をやる。普通の狐と違い毛色は白い。眉間の辺りに青い模様のようなものがあった。それに尻尾は三つもある。立ち止まってじっと見ていたせいだろうか。桐生が顔を上げ、比奈を睨んだ。

「何だよ」

「いえ。あの、ごめんなさい」

彼の目に怯んでつい比奈は謝った。だめだ。彼には聞けない。怖い。後で誰かにきいてみようかな。そう思いながら比奈はゆっくりと自分の席についた。

比奈の前の席に座っている桐生は昼休憩のチャイムとともに教室から出て行ってしまった。授業の間、比奈は桐生の頭上の狐が気になって授業に集中出来なかった。

黒板に目を向けると必ず桐生の頭の上に乗っている狐が目に入る。その狐の三本の尻尾が上下左右に動くのが気になって仕方がないのだ。

ただでさえ内容が良く解らないのに。そう思いながら溜息をついた時だった。比奈の横に座っていた女生徒が比奈に声をかけてきた。「ねえ。楠木さん。一緒にゴハンしょ」

快活に笑う中野歩美につられて、比奈も笑顔をつくった。比奈は

中野と他二人のクラスメートとともに昼食を取る事になった。机をくっつけ、その上に弁当を広げる。

母親の作ってくれた色鮮やかなおかずが食欲を刺激する。半分以上弁当を食べ終えたころ、唐突に中野が口を開いた。

「楠木さんのこと、皆気にしてたんだよ」

「そうそう、どんなコかなってね」

「きつと儂げな美少女だとか色々ね」

中野の言葉に、他二人のクラスメート、羽柴と水野が同意する様にそう言った。比奈は一端口に入れようと持ち上げた、タコの形をしたウインナーを下して口を開く。

「うわー。じゃあ皆がっかりだね」

そう言つと、思った以上の勢いで三人一斉に否定された。

「何言ってるの。儂げな美少女って言つと、ちよつと違うけど、楠木さんってスツゴク小さくて可愛いじゃない」

「そうよね。可愛いよね。ちっちゃくて」

「身長何センチ？」

水野に聞かれ、比奈は百四十五センチと答えた。

三人の言つように可愛いかどうかは解らないが、確かに平均身長より低い。丸顔にまつすぐな黒髪のせいか、この間も小学生に間違えられた。可愛いと良く言われるが、それは比奈が言われたい可愛いとは種類が違う。比奈は話題を変えたくて、可愛いを連呼する三人に向かつて声を出した。

「あ、あのね。聞きたい事があるの」

「うんうんいいよ。お姉さんが教えてあげる」

いつの間に姉になったのだろうか。中野が大きく頷きながら笑顔を向ける。だが話題を変えたくて言った言葉だ。何を聞こうか迷つて思いつきを口に上らせた。

「あの、桐生くんのこと……」

頭上に乗っている狐について、と言おうとした。だがその言葉は羽柴の興奮気味の声にかき消された。

「あ、やっぱり。桐生君のことじつと見てたよね。楠木さん」

「そうそう。気になってたんだ私」

羽柴の声に中野が賛同し、ちょうどおかずを口に入れていた水野は頷いた。比奈は慌てて誤解を解こうと口を開いたが、中野に先を取られた。

「まあ、確かに顔は良いけどさ。アイツって目つき悪すぎだよね」

「そう。余りクラスの連中とも話さないし」

「あの……狐は？」

比奈の控えめな問いに、三人は首を傾げた。

「狐？ 何の話？」

「えっと、あの。桐生君、狐飼ってるよね」

中野達は食べ終えた弁当を仕舞う手を止め、顔を見合わせた。

「知らない。狐飼ってるの？ あいつ」

「っていうか、桐生君が動物飼ってる姿、想像つかない」

「でも、爬虫類系だったら飼ってそうじゃない？ 桐生君」

その会話を聞いて、比奈は納得した。そうか、あの狐。皆には見えていないのだ。だから誰も桐生の頭上を気にしなかった。見えな
いなら彼らにとっては居ないも同然なのだ。

もしかしたら桐生自身でさえ、自分の頭の上に狐が乗っているこ
とに気づいていないかもしれない。

比奈には見えるのに。

こういうことは小さい頃から多々あった。自分以外には見えない
存在。そういうものは確かに居た。だが今回の狐は余りにはつきり
見えすぎて、比奈は実在するものとしか認識できなかった。それだ
け強い存在感があったのだ。

だが最初で気づくべきだった。あの狐は普通の狐と違う箇所がた
くさんあったではないか。白い毛色。眉間の蒼い模様。それに三つ
又の尻尾。

あの狐は桐生に憑いているのは間違いなさそうだ。自分にそうい
った類のものを退ける力はないが、御祓い屋のようなところを紹介

する事は出来る。あとで桐生に色々聞いてみようと思った。
おかしいことが起こっていないか、身体に変調はないか。そういったことを。そんな事を考え、ふと桐生の顔を思い出して、比奈は苦笑した。話し掛けることなんて出来るのだろうか。比奈は桐生が怖かった。

比奈は午後の授業の間、どうやって桐生に話し掛けるか悩んでいた。だが放課後になるとすぐに帰ると思っていた桐生が振り返って、比奈に声をかけてきた。

「おい、美化委員会あるから帰るなよ」

「あ。うん」

言われて思い出した。そういえばさつき先生がそんな事を言っていた気がする。

「ちよつと、桐生。比奈ちゃんに意地悪しないでよね」

隣の席の中野が、桐生を軽く睨みながら比奈の腕に自分の腕を絡ませてきた。

「別にイジメてねえよ」

「比奈ちゃん。いい？ いじめられたら絶対にお姉ちゃんに言うんだよ。仕返ししてあげるから」

またもお姉ちゃんになった中野は、桐生の言葉を無視してそう言った。

「ありがとう。大丈夫」

笑顔で答えると、納得したのか中野は絡ませていた腕を解いた。

「おまえ早く部活行かなくて良いのかよ」

桐生がイライラを滲ませた声で言うと、中野は不機嫌な声で言い返した。

「あんたさっきの先生の話し聞いてなかったの？ 今日は特別美化清掃があるからクラブは全部なしなの。お休み」

言われて思い出したのか、桐生がそうだったかと、苦い顔で頷いた。

「じゃあまた明日。比奈ちゃん」

「うんまた明日」

比奈は教室を出て行く中野に手を振って、送り出した。

「おい、早く行くぞ。今日は特別美化清掃で四時半完全下校なんだよ。委員会、遅れたって待っててくれないぞ」

比奈は特別美化清掃が、何かは分からない。きっと業者か何かが入って掃除するのよね。そんな事を思っている間に桐生は机に置いていた鞆を持ち、いつのまにか教室を出て行ったようだ。比奈は慌てて自分の鞆を掴み桐生のあとを追いかけた。

桐生は目立つ。少なくとも比奈にとっては、彼は目立つ存在だ。頭の上に狐を乗つけた少年は彼一人だからだ。

廊下に授業を終えた生徒達が大勢出ていたが、比奈はひと目で桐生の後姿を見つける事が出来た。比奈は安堵した。桐生に委員会が何処であるのか、聞いていない。

数メートル先の桐生に追いつくべく走り出そうとした時だった。

廊下の角に黒い煙が出ていることに気づいた。

火事？ 比奈は走り出そうとした足を止め、その黒い煙に近づいた。

煙だと思ったが違うのかもしれない。比奈がそう思ったのは、黒い煙が一定の位置から動かなかったからだ。普通の煙なら上へ上へとのぼっていくはずである。それに煙の発生源である筈の火がない。煙というより、靄のようだと思っただ。

その黒い靄は、上へ行く代わりにその場に留まり、蠢いている様に見えた。比奈は好奇心にかられ、その靄に手を伸ばす。

だが靄に触れる直前、誰かに腕を掴まれた。

驚いて比奈は顔を上げた。比奈の目に映ったのは不機嫌そうな桐生の顔だった。頭にはやはり狐が乗っている。狐は桐生の頭上から、赤い瞳で比奈を見下していた。

「おい、何やってんだ」

桐生は掴んだ比奈の腕をそのまま持ち上げ、靄に触れようとしゃがんでいた比奈を立ち上がらせた。結構強い力で、少し痛かった。桐生は不機嫌な表情のまま比奈を見つめてくる。比奈は焦って言い訳を口にした。

「黒い靄みたいなものがあつたから……」

思ったよりか細い声が出た。桐生は眉間に皺を寄せ、比奈の見ていた場所に目を向けた。

「何にもねえよ」

「ウソ」

「嘘じゃねえって。おら、行くぞ」

そう言つて桐生は比奈の手首を掴んだまま、歩き出した。比奈は引き摺られるように歩きながら、そつと黒い靄のあつた場所を振り返る。桐生の言葉どおり、黒い靄のあつた場所には何もなかった。

どうして急に見えなくなつたんだろう。

委員会が終わつたあと、比奈は誰も居ない教室に戻り、考えていた。黒い靄を見たときのことだ。黒い靄は確かにそこに存在していた。比奈には見えたのだ。だが桐生に何も無いと言われた瞬間、見えていた靄が見えなくなった。

桐生に何も無いといわれ、比奈がウソと言つたのは、桐生に対してではなかった。見えなくなったことが信じられなかったために、出た言葉だった。

桐生のせいだろうか、見えなくなつたのは。

チャイムが鳴った。

ふと顔を上げて、黒板の上にかかっている時計を見る。時計の針は四時半を指していた。下校のチャイムだ。

そつえば特別美化清掃があると言つていた。業者の人が来る前

に早く帰らなければ。

比奈は教室を出ようと慌てて立ち上がり、そのままの格好で動きを止めた。

「桐生君の狐……」

いつから居たのだろうか。ドアの前に白い小さな狐がいた。桐生の頭の上にいたあの狐だ。四本足で立ち、じつとこちらを見ている。吸い込まれそうな赤い瞳。その赤い瞳と比奈は見詰め合った。どれくらいそうしていただろう。

不意に比奈の視界が歪んだ。揺ら揺らと身体が揺れる。比奈は手近にあった机に手を付いた。

立っていられない。急激に眠気が襲っていたのだ。何故と思うまでもなく、比奈は意識を失った。

不意に寒気を感じて、比奈は起き上がった。随分硬い場所で寝ていたようだ。

辺りは暗い。ここは何処だろうと寝ぼけた頭で周りを見回した。家じゃない。

比奈は慌てて立ち上がった。暗さに慣れてきた目に映ったのは、窓から入る月明かりに照らされた、机や椅子。教室だった。

そうか。桐生君の狐。狐を見てから……急激に眠気が襲ってきたのだ。思い出して比奈は寒気を覚えた。急に怖くなって、比奈は床に落ちていた鞆を拾うと教室を飛び出した。

暗い廊下に比奈の靴音が響き渡る。誰も居ないのだろうか。美化清掃があると言っていたはずなのに、一人見当たらない。

比奈は窓から入る月明かりを頼りに走った。途中で右に曲がれば階段がある。早く、早くこの学校から出なければ。強迫観念にも似た思いが比奈の胸を占めていた。

比奈は廊下の途中、渡り廊下へと通じる角を曲がった。

「どうして？」

角を曲がれば右手に階段があるはずだった。思い違いなわけがない。登校したときも、移動教室の時も、この角を曲がった場所に階段はあった。

だが今比奈の前には先が見えないほどまっすぐ延びた廊下が見えるだけだった。窓やドアは見えるが、あるはずの階段がない。

それに、こんなに廊下が長いわけがない。

比奈は踵を返した。来た道へ戻れば、帰れるかもしれない。根拠はなかったが、まっすぐに伸びた奇妙な廊下を突き進むよりはマシな気がした。

教室は左に曲がれば良い。

比奈は左に足を向け、またもや立ち止まった。

比奈の行く手には何処までも続く、長い廊下があった。先ほどと同じ、先が見えないほど長い廊下。右を見ても同じだった。

閉じ込められたのかもしれない。学校に。

比奈は持っていた鞆を両腕でぎゅっと抱いた。比奈の前にある窓から月が見えた。満月だ。灯りのない廊下に、唯一光を届けてくれている。その月にゆつくりと雲がかかった。黒い雲は月の姿を隠していく。光が届かなくなる。月が完全に雲に隠れると、比奈の周りは闇に包まれた。

立ち尽くす比奈の背に冷たい風が当たる。真冬のように冷たい風だ。なぜ風が吹くのだろう。窓は見える限り何処もしまっていたのに。比奈はゆつくりと振り返った。それと時を同じくするように、ゆつくりと灯りが入ってくる。月を隠した雲がその前から通り過ぎようとしているのだろう。比奈の瞳に、廊下に自分の影が薄く大きく伸びるのが映った。そしてその先にあるものも。

「あれは……」

夕方見た靄が比奈の数メートル前にあった。昼に見たときは廊下の角に小さく留まっていた靄は、いまや廊下の天井にまで達してい

た。闇の中でもわかるほど黒い。辺りを漂っていた靄は一つの形を成していく。雛の目には靄が人型をとっていくように見えた。

「な、何がどうなってるの」

暗い廊下で、一人。比奈は立ち尽くした。怖くて仕方がないのに、動けなかったのだ。まるで魅入られたように、黒い靄が人の形をとっていくのを見つめていた。

比奈の見ている前で、人型になった黒い靄は三メートル近い巨体を動かし、比奈に向かって腕を伸ばした。

つかまってしまふ。脳裏に浮かんだ言葉に動かされるように、比奈は足を動かした。間一髪で黒い人型の腕を逃れると、何処までも続く廊下をひた駆ける。

すぐに息が上がった。それでも立ち止まるわけにはいかない。あの黒い靄につかまればろくな事にならないのは目に見えている。

暗く長い廊下に、比奈の足音と呼吸音が響く。

どれくらい走ったのだろう。汗が額から流れる。足に力が入らなくなってきた。そう思った瞬間、足がもつれた。派手に転び、持っていた鞆が遠くへ飛んだ。

慌てて起き上がるうと手を付いたとき、後ろから大きな影がかかる。

恐る恐る振り返った比奈の目に映ったのは、あの黒い人型だった。

比奈が息を飲む。黒い人型は腕を上げると、比奈目掛けてその大きな腕を振り下ろした。

悲鳴をあげ、比奈はとつさに腕で頭を覆い、目を瞑った。

だが、一向に覚悟していた衝撃や痛みはやってこない。そつと閉じていた瞼を開けると、大きな白い生き物が目の前にいた。比奈の目にまず映ったのはたくさんのおさふさとした白い尻尾。白い毛に覆われたその生き物は馬ほどの大きさだ。低く唸る声はこの動物から発せされているようだ。

黒い靄の人型はその動物に気おされるように、動物と対峙している。

「狐？」

比奈の口から出た言葉に、動物は顔をこちらに向けた。その顔は比奈の覚えている狐と類似している。白い毛といい赤い目といい、額の蒼い模様といい、桐生の狐とそっくりだ。

比奈はじつと狐を見つめた。不意に狐は眉間の辺りに皺をよせて、口を開いた。鋭く尖った歯が見える。

『狐？ わしの事をそんじよそこらの狐と一緒にするでないわ。小娘』

「こ、こむすめって、……そうじゃなくて、しゃ、しゃ、しゃべ、しゃべって」

比奈は今更ながら、混乱していた。黒い人型も、目の前のこの巨大な狐も、有り得ない事ばかりだ。夢ではないかとさえ思う。だが転んだ時にうった足は痛いし、走ったせいで息が上がって苦しい。

『見た目どおり馬鹿な小娘じゃ。だが確かに鬼見の才があるようじやな。確かめられて良かったのう、隼人よ』

狐は黒い人型より奥にいる人物に声をかけた。比奈は狐の後ろからそちらを覗いてみる。

「確かめられて良かった……じゃねえ。何でそいつがそこにいるんだよ。紅^{くれば}葉」

声を荒げ、比奈を指差したのは比奈の予想どおり桐生だった。相変わらず不機嫌そうな顔。比奈を指差している方とは逆の手には、何故か竹箒が握られていた。

「あ、あの、そいつって私？」

「お前以外に誰がいる」

遠慮がちに聞いたら怒られた。

『これこれ。そう怒鳴るものではないぞ、隼人よ。気を逸らすから見ろ。動き出すぞ。ソレが』

狐の声につられて比奈は黒い人型を見た。狐が出てきてから固まったように動かなかった黒い人型が突如動き出した。黒い人型に声帯があれば、大きな咆哮が響き渡っただろう。

黒い人型から強い気が迸る。空気が振動した。何かを破るように腕を一振りした黒い人型は、桐生に向かって腕を振り上げた。

「桐生くんっ」

比奈は悲鳴の様に桐生の名を呼んだ。容赦なく、黒く大きな腕が桐生に襲い掛かる。

桐生が持つていた竹箒を持ち上げた。自分を庇うように箒を両手で掲げ持つ。そこに黒い大きな腕が打ちつけられた。大きな腕に対して竹箒は余りにも脆弱だ。桐生が押しつぶされてしまう。だが比奈の予想とは裏腹に、桐生は竹箒で黒い人型の大きな腕を支えている。しかしその腕は震えていた。

「き、狐さん。桐生君が、桐生君が……」

比奈は立ち上がると、狐の首に腕を回して叫んだ。桐生を助けてあげてと言いたかったのに上手く口が回らない。どうして良いか分からずに、比奈は狐の首に回した腕により一層力を込めた。

『お、おい。小娘離せ。離せと言っておるんじゃ……く、苦し……』
「え？ きゃっ。ゴメンなさい狐さん」

思った以上に腕に力を込めてしまったようだ。いつの間にか狐の首を絞めていた。比奈は慌てて腕を解いた。危ない。殺人、いや、殺狐になるところだった。そんな事を思っていた比奈に、狐は一つ咳払いしてこう言った。

『大丈夫じゃ、隼人は。見てみい』

狐が赤い目を細め比奈を見た。比奈は狐が笑った様に見えた。狐に言われるまま桐生の方へ目を戻した比奈の耳に、桐生の声が届く。
「うおおおおお」

桐生は声を上げると、黒い人型の腕を押し戻した。黒い人型の腕の下から逃れ、比奈たちのいる方とは逆へ跳躍した。その隙をつく様に狐が大きく口を開く。口の中から赤い炎のような丸い固まりが飛び出し、黒い人型ぶち当たる。黒い人型は轟音とともに床に倒れた。

黒い人型と距離を置いた桐生は一度息を吐くと、持っていた竹箒

を竹刀の様に一振りする。

「あれ？ 箒が……」

桐生が竹箒を一振りした時、竹箒が淡く青白い光を発した様に見えたのだ。その光は今竹箒を覆っている。比奈は息を飲んだ。

違う箒だけじゃない。桐生君も光ってる……。

「綺麗」

比奈はつい口走っていた。本当に綺麗に見えたのだ。黒い人型と対峙している桐生は、いまや青白い光を纏っている。まるで人ではない、神聖な生き物のようだ。

比奈は桐生に見惚れていた。

「紅葉。お前がそいつを守れよ」

『やれやれ面倒くさいのう』

「面倒くさいって言うなっ」

桐生はそう一喝する。桐生を包んでいる青白い光が動き出した。

その光は竹箒の方へ異動している。箒に光が集まっていく。

「消えうせろっ」

桐生は叫ぶように言うと、ようやく上半身を起こした黒い人型に向かつて突進した。黒い人型から少し距離をあけて、箒を上段に構え振り下ろす。青い光は大きな球状の光となって黒い人型にぶつかった。光を乗せた突風が比奈たちのいる場所まで届く。だが光の風は比奈と狐を避ける様に、通り過ぎていく。

光が霧散した。黒い人型が崩れていく。黒い人影は元の靄へ、そしてそのまま青白い光に包まれるように消えていった。

「す、すごい」

比奈は呆然と呟いていた。腰が抜けて、狐の横に座り込んだ。何だったのだろう、今のは。あの黒い人型も、桐生から発せられたあの青白く凄まじい光も。一体何だったというのだろう。

「大丈夫か」

劣るような声が、比奈の頭上から降ってきた。比奈がゆっくりと顔を上げると、怒った顔ではない桐生の顔が見えた。比奈と目が合うと困ったように目を逸らした。

「だ、大丈夫」

比奈が答えると、桐生が手を差し出してきた。比奈がその手を取ると、強い力で引き上げられる。立ち上がったが、まだ足に力が入らずよろけてしまった。

転びそうになった比奈を桐生が慌てたように支える。礼を言おうとして顔をあげ、桐生の顔が思ったよりも近くて驚く。顔が熱くなった。それにつられたように桐生の顔も赤くなる。

桐生と比奈は見詰め合った。

急にボフンと妙な音が聞えて、比奈はあたりを見回した。

『おい。ワシを忘れてはおるまいな』

声が聞こえて、我に返った比奈は、慌てて桐生から身体を離れた。狐が小さくなっている。

「変なこと言ってんじゃねえよ。紅葉」

桐生が狐に向かって不機嫌な声を上げる。狐は桐生の身体を軽快にのぼり、定位置の頭へ座り込んだ。尻尾が三つに減っている。

「あ、あの、ねえ。桐生君くれはって狐さんの名前？」

「そう。九尾の狐……つまり妖怪。俺の仕事のパートナーなんだ」

「ふーん。じゃあ、桐生君も妖怪？」

そう言つと、桐生と狐はそろって顔を引きつらせた。

狐が前足でさつと自身の耳を塞ぐ。

「俺のどこが妖怪に見えるって言うんだ」

桐生の怒鳴声が廊下に響いた。

比奈はびくつきながらも言い返す。

「パ、パートナーって言ったし、桐生君光ってたし。普通の人とは光ったりしないわ」

「光ってたって、俺が？」

不思議そうに聞き返されて、比奈は頷いた。

『ほう、小娘。その鬼見の才は相当のものと見える。隼人の気まで見えていたとは』

「俺そんなの見えた事ないぞ」

『お前より見える性質らしいな。その小娘は』

「あ、あの、どういうこと？」

不思議そうに聞き返した比奈に、狐は比奈を見下ろして口を開く。
『小娘よ。お前は人にあらざるものを身ることの出来る鬼見の才がある。さっきの影を見たじやろう』

「影って何なの？ あの黒い人型のこと？」

桐生と狐を見比べ早口にまくし立てた比奈を、桐生が片手を上げて遮った。

「影ってというのは人が多く集まるところに溜まる雑鬼の総称だ。闇の部分や悪感情を喰って成長する。この学校は溜まりやすいんだ」

「……私、なんで襲われたのかしら」

独り言の様につぶやくと、それを聞きつけたらしい桐生が答えてくれた。

「まあ、鬼見の才を持つ奴を喰えば力が上がるって言われているかな。今までにも怖い目にあつたことあるだろう」

あつて当然というように桐生に言われ、比奈はしばし考えた。

「うーん。たまに、顔がどろどろに溶けて崩れた人とか見たりはしたけど、それは普通だから別に怖くないし」

当たり前のことを言っただけなのに、桐生はまた頬を引きつらせた。

「……顔がどろどろに溶けて崩れた人見たら、それはそれで普通怖いだろ？ なあ紅葉」

『小娘はやはりずれておるのう』

「え、そう？ 私ずれてる？」

比奈にとってはそう言うものを見るのは日常である。だが桐生たちは首を縦に振った。

その時ふと思い出した。そういえば今日は特別清掃の日とかなった気がする。こんな所にいるのを見つかれば、怒られるかもしれない。

「ねえ、桐生君。そろそろここ出ないと清掃員の人とかに見つかったら不味いんじゃない？今日は特別美化清掃だって……」

「ああ。それなら清掃員は俺ってことだな」

「え？　どういうこと」

「特別美化清掃っていうのは、俺たちがさっきみたいな影を退治するときに使ってるんだ。影を抜うとき誰かいたら邪魔だろう」

『小娘。邪魔にされとるぞ』

「狐さ……じゃない。紅葉さんが私を眠らせたからじゃない」

からかわれて、比奈はむくれた。桐生は咳払いして話を元にもどす。

「俺の家は代々御祓い屋をやってて、この学校は俺の家と契約してるんだ。俺が今日みたいに影を見つけた時に、特別美化清掃と言う名目で人払いしてもらってんだよ」

「へえ。じゃあ特別美化委員ってとこね」

比奈は一つ手を打って、言ってみた。桐生に変な顔をされた。桐生の頭上の狐は一瞬考え込むように目を閉じる。再び目を開くと、比奈を見下ろしてこう告げた。

『小娘よ。それなら小娘も特別美化委員会とやらに入ってみてはどうじゃ？』

「おい紅葉、委員会じゃなくて仕事だぞ」

桐生が頭の上の狐を軽く叩く。狐は舌を出した。完全に桐生を馬鹿にしている。

『鈍い隼人には小娘の鬼見の才があると助かるじゃろう。それに小娘だって妖怪や物の怪から身を守る為には隼人と一緒におった方が良いんじゃない。違うか』

紅葉の言葉はもつともなように聞えて、比奈と桐生は思わず見詰めて合ってしまった。

良いかもしれない。桐生君カッコいいし。狐さんはかわいいし。

それにあの怖いものからも守ってくれるなら……。比奈は決意した。

「はいっ。私入ります。特別美化委員会」

そう宣言すると狐が満足そうに笑い、比奈の頭の上に飛び移った。

桐生が声を上げる。

「だからっ、特別美化委員会なんて存在しねえっ」

桐生の叫び声は虚しく、廊下に響き渡るのだった。

（後書き）

ここまでごらんいただき、本当にありがとうございました。

このお話は、愛田が初めて描いた短編でございます。

ちよっぴりアクションの入った小説をこちらに投稿するのは初めてですねえ。

あまり、人物にフューチャーできなかったのが心残りであります。
いまいち紅葉とか、比奈の謎が解明されていない感じですね。

これも、全て400字詰めで、30枚で描くという制約に負けた結果です。それでも、あえて投稿したのは、愛着があるからにほかなりません。

何も考えず、暇つぶしに読むには良いかと思ひまして。

ではでは。またいつかお会いできる事を祈りつつ。

愛田美月でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5903e/>

特別！美化委員会

2010年10月8日15時51分発行